齒 科 外 科

Die Örtliche Betäubung in der Zahnheilkunde

Von Guido Fischer 8. Auflage

(グイド、フischer著 齒科局所麻酔學第8版)

本書ハ齒科領域ニ於ケル局所麻酔ノ著述トシテ有名ナ Guido Fischer 氏ノ Die Örtliche Betäubung in der Zahnheilkunde ノ最新版(第8版)ヲ此改訂版ノ特長トスル所ハ著者ガ大英斷ヲ以ツテ其型ヲ四六版ニ縮小シテ携帶ニ便ナラシメタ點ト今迄ノ舊版ガ兎角冗長ノ傾アリタル記述ヲ新版ニ於テハ歴史の綜觀トカ局所麻酔ノ前準備等々ノ項目ヲ省略總テニ簡潔ヲ期シ實際化セシメタ點ニアリ。240頁140插圖ヲ有スル極メテ端麗ナモノトナツテ出版サレタ。

内容ヲ通覽スルニ大體舊版ノ記述ヲ基調トスレド全般ニ互ツテ改行補正セル所少カラズ、殊ニ第三章末ニ Der feinere Stoffwechsel der Zähne ナル項目ヲ設ケ近時著者ガ發表セル齒牙及其附近組織ノ生物學的研究成績ノ要點ヲ數葉ノ顯微鏡寫眞ト共ニ略記シ局所麻酔液ノ之等組織ニ及ボス影響及ビ麻酔液ノ組織ニ對スル要約ニ就テ著者一流ノ見解ヲ附セルアリ新版ノ目新シキ點ノ一ツト云フヲ得ベシ。技術編ニ於テモ最近ノ種々ナル幹部麻酔方、紹介批評ニ努メタル跡ヲ認メル事ガ出來ル。

尙別刷附録トシテ種々ナル注射液、注射後ノ心臟機能ノ曲線圖竝ニ齒科領域局所麻酔ニ必要ナル局所解剖圖ヲ美麗ナル彩色版トナシテ局所麻酔實施上ノ參考ニ便ナラシメタル如キ經驗深キ著者ノ用意ノ程ヲ視フニ充分ナリト評スルヲ得ベシ。(定價16.60「マーク」)(中村抄)

下顎孔注射カ迷朦?

Mandibularinjektion oder Rauschnarkose?

von M. U. Dr. Kurt Kapper, Prag. (Z. f. S). Heft. 13. 1933.

知覺麻痺法トシテ使用セラレル下顎孔注射法或ハ迷朦法ノ可否ニ就イテハ屢々論爭サレテ居ルガ、著者ハ自身ノ經驗及ビ見解ヲ述ベ、臨牀上殊ニソノ適應ニ關シテ意見ヲ加ヘテキル。

下顎孔注射 下顎孔注射ハ迷朦ニ比シ、ソノ實施法ガ容易デアル。サテ下顎孔注射ノ際ニ、「ノボカイン」液ガ正確ニ下顎頸溝(Sulcus colli mandibularis)ニ注入サレナクトモ、翼狀下顎間腔(Spatium Pterygomandibulare)ノ脂肪組織ノ中テ、ソノ重量ニ相當シ沈下瀰散スルヲ以ツテ、注射セル側ヲ下ニシテ頭部ヲ水平ノ位置ニ保タシメル事ニヨリ、ヨク作用シ目的モ達セラル。

然ラバ、如何ナル場合ニ下顎孔注射ノミガ適應シテ居ルカト云フニ、1) 下顎ニ於ケル比較的大ニシテ長時間ヲ要スル手術。即チ腫瘍、大ナル嚢腫ノ除去、剔出及鑿除等。2) 埋伏齒、骨中ニ殘存セル大臼齒根、轉位齒等ヲ除去スル際。3) 急性又ハ慢性骨膜炎ヲ有スル齒牙及齒根ノ拔去ノ際。4) 不規則ナ位置ニ在ル齒牙ノ拔去時。

下顎孔注射ノ不快事項 注射針ハヨク破折スルモノデアル、殊ニ材料ノ缺點ニヨツテ起ル。

次ニ注射液送入方向ノ誤リ注射液ノ吸收障礙及同時ニ口腔細菌ノ送入等ニヨツテ、内翼狀筋ノ血管腫ヲ來タス事ガアル。數日間大ナル疼痛ト牙關緊急ヲ來タシ終ニハ血管腫ハ化膿スルニ至ル。更ニ臨牀上最モ危險大ナル事ハ、無菌のデナイ針又ハ液ノ使用、穿刺ノ際口腔細菌ノ送入ニヨリ大白齒後方感染ヲ來タス事デアル。コレハ疼痛ヒドク、或ハ膿瘍ヲ形成シ、或ハ骨髓炎ヲ起シ、時トシテ敗血症ニナル。要之、下顎孔注射ハ大白齒部ノスベテノ長時間ヲ要スル手術ニ適應スル。又單根齒部デハ其所ニ限局性ノ疾患(齒根注射ノ出來ナイモノ)ガ在ル時ニ利用サレル。併シ細心ノ注意ト消毒ノ完全ニヨツテ危險ヲ少クスル様ニ努ムベキデアル。

迷嚢(吸入麻醉) 臨牀上問題ニナル程度デハナイガ、確カニ注射ハ局所ヲ機械的ニ障礙シ脈管緊張性、神經性ニ創傷治癒ヲ障礙スル。然シ迷嚢ヲ利用スルト斯ル心配ハナイ。然シ全然危險ガナイデハナイカラ嚴密ニ適應シタ場合ニノミ利用シナクレバナラス。

著者ハ Gewäthyl ヲ專ラ使用シテイルガ、Chloräthyl, Bromäther ヨリモヨイ。氣持良ク匂ヒ、ヒドク冷タクモナク、速ニ作用ヲ現シテ再ビ速ニ消失スル。約30滴ヲ與ヘル時ハ1分間ニシテ患者ハ深クチムル。牙關緊急ノナイ時ニハ開口器ヲ用フルヨリモ「ゴム」楔ヲ利用スル方が便利デアル。一般ニ全身麻醉ニ於テ女ハ男ヨリモ容易ニカ、リ易イ。尙著者ハ弱イ子供、老人、衰弱體質(結核)、重症新陳代謝障礙、心臟瓣膜症ノ人々ニハ此ノ方法ヲ避ケテ居ル。如何ナル場合ニ迷嚢ガ適應スルカ? 1) 出齦困難症ノ際。廣範ナル軟組織ノ浸潤ガアル際ニハ注射スル事ハ禁物デアル。豫メ、Röntgenノ像ヲ齒牙ノ方向ヲ測定シテオイト、Leclus氏ノ挺子ヲ齒牙ヲ脱臼シ鉗子デツカミ出スト、齒牙ヲ吸入サス危險ガナクテ良イ。2) 牙關緊急ノ際ニ、何等カノ理由デ口腔外下顎孔注射ヲ避ケチバナラス時ニ行ハレル。3) 甚ダシク動搖セル大、小白齒ノ抜去即チ齒槽膿漏等ノ際深イ化膿シタル齒齦囊ヲ有スル齒齦ニ注射スル事ハ思ヒ止マルベキモノナルガ故ニ此ノ方法ヲ用フ。4) 短時間デナサレ得ル膿瘍ノ切開ニハ特別ニ適應シテ居ル。5) 軟組織ノ強度ニ腫脹セル急性骨膜炎ニ於テハ、迷嚢ノ下ニ拔齒スレバ常ニ結果ガ良イ。6) 蜂窩織炎性ノモノニ於テハ、口腔底蜂窩織炎ヲ起ス危險ヲサケルタメニ迷嚢ヲ用フ。迷嚢ニヨル時ハ確實ニ無痛デアツテ、此ノ點ハ注射ニ勝ツテイル。迷嚢ハ適應症ヲ嚴守シ使用ニ當ツテ少量ツツ藥液ヲタラス時ハ、殆ンド一命ニ關スル様ナ危險ハナク、ドノ文獻ニモ Gewäthylヲ使用シテ死ニ至ツタト云フ例ハ見ラレナイ。(本田俊一)

齒牙出齦困難症竝ニ智齒拔去ニ對スル臨牀補遺

Beitrag zur Klinik der „Dentitio Difficilis und zur Entfernung des
Weissheitszahnes. Von Ludwig Köhler. Köln. V. f. Z. 1933. Heft. 1.

所謂齒牙出齦困難症ノ頻發ハ臨牀家ヲシテ該疾患ニ對シテ特別ノ注意ヲ拂ハセテキルモノデ、著者ハ此領域ニ於ケル研究ノ結果、診査上ノ注意及ビ容易ナ拔齒竝ニ後處置ニ關シテ所見ヲ述ベテ居ル。